

福岡大学 医学会ニュース

No. 63

福岡大学医学会 福岡大学医学部内

医学部—いま、むかし—



名誉教授 前薬理学教授

桂木 猛

三十三年間、お世話になった福岡大学をこの三月末に以って退職致しました。長い間、医学部の変化を

研究を支える貴重な戦力となっていました。しかし、このブームも、専門医制度のスタートを機に、あえなく終焉を迎えました。

就任当時の薬理学の講義は、2〜3年次の間の一年半に渡ってゆつたり行われ、現在と違い、学生の顔と名前を憶えるのに十分な時間がありました。また、学年コンパも盛んに行われ、学生と教官の距離も非常に近かった様です。この間、教育面での変化は左程なく、

大きく変貌したのが、何と云っても研究面で、実験技術の進歩と共に専門領域の垣根が急速に取り払われて行きました。以前、東北大学の応用生理に在籍した経験から、薬理学と生理学の研究上の変化についての感想ですが、当時の薬理学の研究は、薬による平滑筋などの収縮や弛緩の変化から、受容体の解析を行ったものです。

一方、生理学は、イオン類が中心で、テトロドトキシンは例外ですが、一般に薬を使うのは、邪道と言われていました。ところが、現在は、どの分野でも言えることですが、遺伝子解析や遺伝子改変動物などが駆使され、薬による解析も盛んで、また、テーマも似たようなトピックスを扱うことで、両者の間の研究上の差異はほとんど存在しないように見受けられます。従って、多額の研究費を集め、多くのスタッフを抱えた大研究室が競争上、極めて有利であり、この傾向は、近

術による止血などの急部を中心とした救急症例がおおく、時間外に迅速な対応してくださった仲間感謝します。当時は当院のような忙しい日々を送っていました。技師さん、看護師さんを含めたスタッフの方々は腹のIVRは初めてやることばかりで、戸惑われたことも多かったと思います。たまただ、大声と馬力についてきってくださいました。三年目の症例の反省と一連の総括を続けることにより、原著論文を他科の医師を含めた仲間と共に相当数作成することができました。臨床の原

著論文の最大の大本は個々の症例の集積にある事を強調したいと思っています。その後、好きなIVRを継続させていただき、同学会の理事長、肝臓研究会主催、肝臓診療ガイドラインのIVRの項担当等をつとめさせていただきました。最後に、皆様のご指導、ご協力の下、大声を張り上げ楽しく過ごさせて頂きました。福岡大学の更なる発展を祈念して項を閉じさせていただきます。

退職のご挨拶



名誉教授 前放射線医学教授

岡崎 正敏

約三十年間お世話になった福岡大学を退職しました。四十余年の医師生活で、私にとって、印象深く残っている思

た。その時の互いを底い合う仲間意識はまよなく、「One for all, all for one」といふ実感で、現在も交流が続いている方も少なくありません。一九七〇年代に、国立がんセンターで八年半すごしました。私の師匠市川平三郎先生(同センター名誉院長)の口癖は、①「分ったふりするな」②「自分の意見をはっきり述べよ」③「他人の意見に安易に妥協するな」④「納得いくまで討論しろ」

②「分かりやすい言葉を使

参加やグラスゴー大学留学を通して、我が国の現状は鑑定資料の法的有効性、分析の正確さ・信頼性、分析結果の解釈の妥当性などに極めて大きな問題があることを認識しました。

そこで、欧米の関連資料の翻訳・紹介、法医学会メンバーと立ち上げた法医学中毒学ワーキンググループによる関連課題への取り組みとともに、欧米の法医学中毒学者の助力を得て、科研による「薬毒物鑑定の精度管

理・信頼性確保のための戦略研究」、「法医学中毒学研究室ガイドライン」の導入に関する戦略研究」を行い、その成果を広く公表しました。

他方、日本法医学会総会の特別講演で「法医学中毒学の現状と未来」現状を直視し、夢を実現する道を探る」という演題で我が国の法医学中毒学充実の方策・未来像を提示しました。

さらに、民主党・法務部門会議「死因究明ワーキングチーム」、日本弁護士連

合会、衆議院法務委員会の勉強会、異状死死因究明制度の確立を目指す議員連盟の勉強会などで、法医学中毒学とその重要性を啓発し、冤罪を生む可能性のある薬毒物鑑定の現状とその改善策、近未来のあるべき姿などを講演しました。

そして昨年来、警察庁の「犯罪死の見逃し防止に資する死因究明制度の在り方に関する研究会」に法医学中毒学唯一の委員として参加し、この四月に「最終とり

まとめ」を国家公安委員長に提出しました。提言事項の早期実現を願っています。

法医学中毒学一筋、その発展のために力を注ぎ続けられた幸せを心に刻み、サムエル・ウルマンの青春「歳を重ねただけで人は老いない／理想を失うとき初めて老いる」をモットーに今を生きていきたいと思っています。

末筆ながら皆様御健勝と御活躍を祈念いたします。

法医中毒学一筋



名誉教授 前法医学教授

影浦 光義

長いようで短い三十二年。お世話になりました法医学教室初代主任教授・永田武

に心より御礼申し上げます。過ごさせて戴いたことです。在任中の一番の思い出は、講義をサポートしたり、仮進級した学生さんなどには厳し

いことも申しましたが、皆

明先生はじめ関係者の皆様

平成二十三年四月一日より、小児科学教室の准教授を拝命いたしました。私は一九八四年に福岡大学医学部を卒業後、母校の小児科に入局しました。

小田禎一教授、満留昭久教授、現在の廣瀬伸二教授のご指導のもとで、臨床小児神経学を専門として、多くの子どもたちとその御家族に出会って参りました。研究分野では、新生児の電気生理学の分野で学位を取得させて頂いていただきました。末梢神経伝導検査のなかで、late response^①あるF波H波について、新生児の正常値、未熟児と成熟児の発達の相違についての研究が主体です。臨床においては、小児のてんかんの脳波を中心とした診断と治療、発達障害をもつ子どもたちの診断と家族への支援、医療と教育、福祉との連携に力を

心臓血管外科学准教授
和田 秀一



注いでおります。平成二十三年一月に福岡大学病院小児科は、外来、病棟とも、新診療棟に引っ越しし、小児医療センターとして生まれ変わりました。外来、病棟も病気の子どもたちと御家族が落ち着ける優しい内装デザインとなりました。そして九月には小学、中学の院内学級（なのはな学級）も本館二階に移転します。長期入院が必要な子どもたちにとって、さらに病院内でのチャイルド・ライフが改善されていくと期待されます。お力を注いでいただいた大学関係の皆様は心からお礼を申し上げたいと存じます。期待に沿えるように質の高い小児医療を提供していく所存です。

このたびは田代忠教授のご推挙により、平成二十三年四月一日より心臓血管外科准教授を拝命いたしました和田秀一と申します。一九六五年生まれ、広島県出身です。一九九〇年に福岡大学を卒業しました。学生時代から心臓外科に興味がありましたが、続けていく自信が全く無かったので、とりあえず大外科医局である広島大学第一外科に入局しました。関連病院で研修を行った後、一九九七年から広島大学の心臓血管外科グループに所属し、二〇〇〇年に学位をいただきました。また二〇〇〇年からフランスのボルドー大学心臓血管外科に二年間の臨床留学をしました。二〇〇二年に帰国し、その後は広島大学病院、尾道総合病院、川崎幸病院で働きました。前任地の川崎幸病院は、年間三〇〇例以上の大動脈治療（胸部約二五〇例、腹部約一〇〇例）を行っている、日本でも有数の大動脈症例数の病院でした。私は主に胸部大動脈の手術約一〇〇例程度とステントグラフト治療五〇例程度を行っていました。胸部大動脈手術は心臓血管外科の手術の中でも最も、時間が長く、死亡率が高く大変な手術で

す。その中でも胸部大動脈手術は全国平均の死亡率が約二〇％もある、その最たる手術です。私自身は、まだまだ改善の余地があると考えており、私の最も専門とする手術です。日本で年間二〇〇〇〜三〇〇〇例程度しか行われていない手術ですが、私はこれまで約一〇〇例の胸部大動脈手術を行ってきたと存じます。手術の診療を中心に行っています。また二〇〇五年より当院で開始された生体部分肝移植にも微力ながら協力させていただき、高度先進医療にも取り組んでおります。医師になり早二十年が経過しましたが、その半分以上の月日を福岡大学で過ごしたことになります。福岡大学にも愛着が芽生え、学生教育と卒後教育に熱が入るようになりました。最近では医局運営で時間が割かれることが多くなってきましたが、今後は福岡大学医学部の発展と人材育成にも尽力したいと思っています。よろしくお願いします。

消化器外科学准教授
山内 靖



本年四月より准教授を拝命いたしました。一九九一年に宮崎医科大学（現宮崎大学医学部）を卒業し、一般病院で臨床外科医としての研修をスタートしました。一九九五年に岸和田徳洲会病院消化器内科で内視鏡医としてのトレーニングを受け、また一九九九年に国立がんセンター中央病院にて肝胆膵外科の手術治療を学びました。ご縁があり二〇〇〇年に福岡大学第二外科に入局いたしました。入局後は、旧生化学第一

（黒木政秀教授）にお世話になりながら接着分子の研究で学位を取得させていただきました。二〇〇二年にはデンマークのコペンハーゲン大学王立病院に留学する機会を与えていただき、臨床肝移植に従事いたしました。これらの経験から、臨床では肝胆道系疾患に興味を持っており、この分野での診療を中心に行っています。また二〇〇五年より当院で開始された生体部分肝移植にも微力ながら協力させていただき、高度先進医療にも取り組んでおります。医師になり早二十年が経過しましたが、その半分以上の月日を福岡大学で過ごしたことになります。福岡大学にも愛着が芽生え、学生教育と卒後教育に熱が入るようになりました。最近では医局運営で時間が割かれることが多くなってきましたが、今後は福岡大学医学部の発展と人材育成にも尽力したいと思っています。よろしくお願いします。

形成外科学准教授
高木 誠司



このたび、大慈弥裕之教授の御推挙を賜り、平成二十三年四月から形成外科准教授に昇格させて頂きました。私は生まれも育ちも大阪で、一九九五年に大阪大学を卒業後

は同大学の形成外科教室に入局しました。学位取得を期してオーストラリアへの臨床留学を経て関連市中病院に勤めていたが、大学病院ならではの大きな手術がどうしても忘れられず所属教室にその旨を伝えましたところ、縁あって二〇〇九年四月からこの福岡大学形成外科教室でお世話になっております。全くの見知らぬ地・職場にきて早くも二年と少しになりますが、周囲の人にも恵まれ、振り返ればとても充実した二年間でした。当初の望み通り、頭頸部再建や乳房再建や多発外傷など数多くの大きな手術に携わることが

できました。ただ、これまでは自分のことで精一杯でした。今後はこのたびの御拝命に伴う責任と重荷をしっかりと理し、後進の指導にも重きをおいて教室運営に関わっていきたくと決意を新たにしています。今後とも臨床医学において形成外科は非常に幅広い分野を診るのですが、形成外科が単独でできることは限られます。外科系や救命を初めとする諸科と協力しながら成す再建外科の領域、皮膚科や内科系の先生方とともに診るべき抗加齢医学や美容医療の領域など、他科の先生方の御協力が欠かせない分野も形成外科にとって

は重要で、今後はそのような分野にもなお層の関わりをもつていきたいと思っております。まだまだ若輩者ではありますが、こんな私で何かお手伝いができることがあれば遠慮なくお声掛け下さい。今後とも宜しくお願い致します。

内分泌・糖尿病内科学准教授
明比 祐子



私は大分市出身で、大分舞鶴高校を卒業後、大分医科大学（現、大分大学医学部）に入学、昭和六十三年に卒業後、大分医科大学第一内科に入局致しました。大学病院以外では大分県立病院、湯布院厚生年金病院等に勤務し、平成六年から約二年間研究生として、第一内科の肥満研究室（当時坂田利家教授、吉松博信研究室主任）で、視床下部のヒスタミンニューロンの摂食抑制作用に関する研究に従事致しました。平成十年四月に、以前大分医科大学第一内科の助教をされていた小野順子教授のもと、福岡大学医学部臨床検査学に入局、また同時に田村和夫教授にお願いし、第一内科で糖尿病、内分泌を中心とした臨床業務に従事

六十三年に卒業後、大分医科大学第一内科に入局致しました。大学病院以外では大分県立病院、湯布院厚生年金病院等に勤務し、平成六年から約二年間研究生として、第一内科の肥満研究室（当時坂田利家教授、吉松博信研究室主任）で、視床下部のヒスタミンニューロンの摂食抑制作用に関する研究に従事致しました。平成十年四月に、以前大分医科大学第一内科の助教をされていた小野順子教授のもと、福岡大学医学部臨床検査学に入局、また同時に田村和夫教授にお願いし、第一内科で糖尿病、内分泌を中心とした臨床業務に従事

教室紹介
呼吸器・乳腺内分泌・小児外科学

当科は平成十八年秋に行われた外科系教室の統合と再編成により旧第二外科から外科講座の消化器外科部門と呼吸器・乳腺内分泌・小児外科部門へ分かれスタートいたしました。一般胸部外科（肺・縦隔）から乳腺内分泌外科、小児外科、さらには肺移植外科（脳死および生体肺移植）まで幅広い治療分野をもっており

呼吸器では平塚講師、濱武講師、藤本助教、柳澤助教、濱中助教、その他に岡田助手（小児）、吉田助手、萩尾座の消化器外科部門と呼吸器・乳腺内分泌・小児外科部門へ分かれスタートいたしました。一般胸部外科（肺・縦隔）から乳腺内分泌外科、小児外科、さらには肺移植外科（脳死および生体肺移植）まで幅広い治療分野をもっており

呼吸器では平塚講師、濱武講師、藤本助教、柳澤助教、濱中助教、その他に岡田助手（小児）、吉田助手、萩尾座の消化器外科部門と呼吸器・乳腺内分泌・小児外科部門へ分かれスタートいたしました。一般胸部外科（肺・縦隔）から乳腺内分泌外科、小児外科、さらには肺移植外科（脳死および生体肺移植）まで幅広い治療分野をもっており

呼吸器では平塚講師、濱武講師、藤本助教、柳澤助教、濱中助教、その他に岡田助手（小児）、吉田助手、萩尾座の消化器外科部門と呼吸器・乳腺内分泌・小児外科部門へ分かれスタートいたしました。一般胸部外科（肺・縦隔）から乳腺内分泌外科、小児外科、さらには肺移植外科（脳死および生体肺移植）まで幅広い治療分野をもっており

呼吸器では平塚講師、濱武講師、藤本助教、柳澤助教、濱中助教、その他に岡田助手（小児）、吉田助手、萩尾座の消化器外科部門と呼吸器・乳腺内分泌・小児外科部門へ分かれスタートいたしました。一般胸部外科（肺・縦隔）から乳腺内分泌外科、小児外科、さらには肺移植外科（脳死および生体肺移植）まで幅広い治療分野をもっており



平成22年度福岡大学医学部呼吸器・乳腺内分泌・小児外科教室同門会懇親会

筑紫病院整形外科准教授

城島 宏



福岡大学筑紫病院整形外科の城島宏です。平成二十三年四月に柴田陽三教授の御推挙を頂き、准教授を拝命いたしました。平成三年福岡大学医学部卒業、整形外科に入局、福岡大学病院・関連施設で研修後、平成六年整形外科大学院へ進みました。直ちに当時の緒方公介教授に渡米を命じられ、St. LouisのBiomechanical Research Laboratoryに留学しました。与えられたテーマを済ませ帰国後に学位を頂き、関連施設を回った後、平成十三年福岡大学病院救急救命センター助教、平成十五年整形外科助教、平成二十一年内藤正俊教授の御推挙で整形外科講師、平成二十二年十月筑紫病院へ異動、現在に至ります。

元々、大学院でのテーマが膝関節の運動解析でしたので、膝関節外科が主なフィールドでしたが、福岡大学では関節リウマチの治療を担当していただきました。私が携わった時期は、関節リウマチ治療の主軸の一つである、生物学的製剤が出た頃で、多くのリウマチ医が戸惑いながらも新しい薬剤の劇的な効果に驚嘆していた時期でもあります。私自身も、疾患の予後を変えられる可能性を持つ治療法に

このたび、吉満研吾教授の御推挙により、平成

巡り会う事は、医者人生に何回も来る事はないだろうとの思いで、診療に携わっていました。関節リウマチの治療は、薬物治療の比重が増すに連れ、複数科の協力が必須になってきました。福岡大学病院での勤務中も、幾多の診療科にお世話になり、共同での臨床報告も行っていました。そこで培われた経験と交流は、私にとって大いなる宝物です。

筑紫病院では、関節リウマチ診療に加えて、しばらく遠ざかっていた膝関節外科も担当しています。今まで以上に、よろず屋的・俯瞰的な観察と共に専門的な知識が要求されています。特に外科的な治療では、常に教科書的な方法が最善とは限らず、浅学非才の身には戸惑う事が多いのですが、ありがたいことに周辺医療機関から症例を紹介していただく機会も多く、自身の臨床力を磨く格好の場を頂いたと思っています。今後も各診療科の先生のご助言・ご助力を頂きながら、診療を行っていききたいと思っています。よろしくお願ひいたします。

筑紫病院は地域医療支援病院となっており、福岡大学病院とは(学生の)教育、研究、診療の面でその位置付けが若干異なります。より地域医療に對しての支援が要求され、地域の諸先生方と密接に連携しながら専門分野で一層地域医療に貢献できるように尽くしていきたい

このたび、吉満研吾教授の御推挙により、平成

と想っています。

研究面では病院の性格上臨床研究が中心となり、准教授、放射線部部長を拝命しました。私は昭和五十八年福岡大学医学部卒業、卒業後、福岡大学放射線医学教室に入局し、研修一年目は聖マリア病院放射線センターで神経放射線科にお世話になり、脳神経外科、脳神経内科、脳神経外科、脳神経急の一貫した研修をさせて頂いたできました。二年目からの福岡大学放射線科の研修の後、福岡大学大学院病態生理学系に入局し、肝細胞癌に対する肝動脈塞栓術の治療効果についての研究で博士号を取得しました。大学院卒業後、岡崎正敏前教授の下でIVR(インターベンショナルラジオロジー)と腹部画像診断を中心に、腹部血管造影、肝細胞癌に対する肝動脈化学塞栓術、動脈内および中心静脈リザーバー埋め込み、胃静脈瘤に対するバルーン閉塞下逆行性経静脈的塞栓術、上下大静脈症候群に對してのIVCステント、救急出血性疾患の止血など心臓と脳神経領域域以外の血管内治療に広く携わってまいりました。血管造影およびIVRは約二万件の経験があります。

筑紫病院は地域医療支援病院となっており、福岡大学病院とは(学生の)教育、研究、診療の面でその位置付けが若干異なります。より地域医療に對しての支援が要求され、地域の諸先生方と密接に連携しながら専門分野で一層地域医療に貢献できるように尽くしていきたい

このたび、吉満研吾教授の御推挙により、平成

看護学科准教授

緒方 久美子



薬理学講師

喜多 紗斗美



大学病院には救命救急センターやICU、CCUなどの設備が整っており、重症患者に対する治療、看護を間近で学べる機会があります。このような恵まれた環境を生かし、学生が学内外で多くのことを経験し、主体的に学んでいけるような教育ができるよう努力していきたいと思ひます。何卒ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成二十三年四月より医学部看護学科の成人看護学に着任いたしました。緒方久美子と申します。福岡市の出身で、九州大学医療技術短期大学部看護学科を卒業後、九州大学病院集中治療部の看護士として六年間勤務しました。その後、千葉と大阪での大学生、大学院生としての専従生活をはさみながら看護教員として、産業医科大学、聖隷クリストファー大学(静岡県浜松市)で勤務し、現在は三カ所目となります。大学では、臨床経験をのご指導のもと、主にイオン輸送体(トランスポーターやチャネル)の機能と病態についての研究を行っています。特に、Na/Ca交換輸送体の心血管系での病態生理学的役割について興味を持っており、分子生物学的手法から動物実験まで様々な方法を用いて日々研究に励んでおります。また、薬理学の基礎研究の面白さを学生に体験してもらいたいと考え、学生ゼミを開講したりもしております。

このたび、吉満研吾教授の御推挙により、平成

から動物実験まで様々な方法を用いて日々研究に励んでおります。また、薬理学の基礎研究の面白さを学生に体験してもらいたいと考え、学生ゼミを開講したりもしております。

教育については、医学部三年生の人体機能学IV(薬理学)の講義と実習の一部を担当させていたにしております。人体機能学IVはこれまでに学んできた基礎知識を臨床へ繋げるための重要な科目であり、常に責任を感じながら講義や実習に従事しております。教育の経験はまだ五年目と浅いのですが、当教室では学生の学習意欲を高めるための様々な新しい試み(実務向けのパーソナルドラマ演習を医学部三年生版に改変した演習)を実施しており、私も教室の一員として少しでも学生教育や大学の発展に貢献できるような様々なことにチャレンジしていきたいと思っております。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い致します。

循環器内科講師

佐光 英人



平成二年度 福岡大学卒業です。学生時代より呼吸器外科医を志しており卒業後は産業医科大学第二外科に入局しました。平成七年大学院進学を機に福岡大学に戻り、現在の自分のLife workである肺移植と出会いました。当時日本ではまだ臨床現場で肺移植が行われておらず実験室、アニメーションセンターだけの話でした。しかし大学院在学中に、白田高歩 前第二外科教授の勧めで、米国の肺移植のメッカであるセントルイス ワシントン大学に留学するチャンスを頂きました。米国では普通に肺移植が行われ

平成二年度 福岡大学卒業です。学生時代より呼吸器外科医を志しており卒業後は産業医科大学第二外科に入局しました。平成七年大学院進学を機に福岡大学に戻り、現在の自分のLife workである肺移植と出会いました。当時日本ではまだ臨床現場で肺移植が行われておらず実験室、アニメーションセンターだけの話でした。しかし大学院在学中に、白田高歩 前第二外科教授の勧めで、米国の肺移植のメッカであるセントルイス ワシントン大学に留学するチャンスを頂きました。米国では普通に肺移植が行われ

平成二年度 福岡大学卒業です。学生時代より呼吸器外科医を志しており卒業後は産業医科大学第二外科に入局しました。平成七年大学院進学を機に福岡大学に戻り、現在の自分のLife workである肺移植と出会いました。当時日本ではまだ臨床現場で肺移植が行われておらず実験室、アニメーションセンターだけの話でした。しかし大学院在学中に、白田高歩 前第二外科教授の勧めで、米国の肺移植のメッカであるセントルイス ワシントン大学に留学するチャンスを頂きました。米国では普通に肺移植が行われ



心臓血管外科講師

西見 優



私は一九八六年久留米大学を卒業し、久留米大学第二外科に入局、心臓血管外科と消化器外科を中心とした医局でした。ここでは心臓グループに属し、当時は心臓移植再開の気運が高まった時期で、研究テーマは「心臓移植の移植免疫に関する研究」でした。免疫抑制剤FK506を用いて、ラットの心臓移植モデルを作成し拒絶反応を誘起、移植後三日から四日のFK506投与による拒絶反応の改善を組織的変化と機序についての研究を行いました。その後三井記念病院で心臓外科レジデントを開始、CABGで有名な須磨久善先生のもとで研修、きついながらも楽しい生活でした。その後、国立九州医療センター心臓外科が新設され赴任、当時バチスタ手術が日本でも開始され、須磨先生と久留米大学での先輩である磯村正先生がいる湘南鎌倉総合病院へ勤務、心不全外科としての最初の一步を経験することになりました。月四〇例の開心術が行われ、その多くは重症例であり全国各地から集まってきました。拡張型心筋症と虚血性心筋症の手術はBattista手術、Dor手術からやがてSAVE手術へと

と発展していくことになりました。その後久留米大学では人工弁不全の研究、特にSJM弁(機械弁)不全の原因となるパナヌス増生の機序およびTGF- β の関与について研究を行いました。二〇〇〇年に久留米大学外科学講師となり、二〇〇三年より聖マリア病院心臓血管外科勤務となりました。しかし自分のテーマである心不全外科への想いもあり、九州地区では田代忠教授が重症心不全患者に対する左室形成術を精力的に行っており、ここでの仕事を希望し、二〇〇七年久留米大学を退職、現在に至っております。今後も重症疾患に対する外科治療に少しでも貢献できればと考えています。今後もよろしくお願ひします。

整形外科講師

吉村 一朗



二〇一一年四月より福岡大学病院整形外科講師として、当院及び脳神経外科での私の役割があると考えています。精一杯がんばりますのでご指導よろしくお願ひします。

〇〇年より国立循環器病センター内科脳血管部門にレジデントとして、三年間勤務いたしました。その際にエビデンスを基に、考察を重視した脳血管障害の臨床を、深く勉強することができました。また、神経超音波を用いた脳血管障害の臨床について研究を行い、とくに経頭蓋カラードプラ検査を用いた研究で学位を取得しました。帰福後は九州大学病院病態機能内科学、国立病院九州医療センター脳血管内科に所属後、二〇〇九年よりオーストラリアメルボルンのNational Stroke Research Instituteに留学いたしました。そこで、現在の虚血性脳血管障害の内科治療のトピックである、経静脈的血栓溶解療法、MRI画像診断と予後についての研究を行って参りました。二〇一一年四月より福岡大学脳神経外科に所属しています。以上の履歴よりわかるように、外科に所属していますが私は内科医です。ですので、手術に入ることはなく、主に虚血性脳血管障害の内科治療や術前の検査を担当したり、神経超音波検査を行ったりしています。また、七月より脳卒中健康講座を開講し、患者さんに最近の脳卒中の治療、日常生活の注意点などについてお話しをしています。脳血管障害の約七割は虚血性であり、その九割は急性期においては内科治療を行います。脳卒中専門医として、また内科医

で溢れたことを鮮明に記憶しております。帰国後は福岡大学病院に勤務し、現在「足の外科」を専門としております。「足の外科」の担当部位は足部・足関節で、ちょうど靴と靴下で覆い隠される部分に相当します。スポーツ障害、外傷(靭帯損傷、骨折)、変性疾患(関節症)、変形(外反母趾、扁平足)、神経障害(足根管症候群、モートン病)など疾患は多岐に及び手術方法も多彩です。しかしエビデンスが少なく非常にやり甲斐がある分野です。特に一貫して力を入れておりますのが足関節・足部に於ける鏡視下手術です。従来のような大きな切開を加えることなく数ミリ程度の小さな切開数カ所で行い早期にスポーツや社会活動への復帰が可能となります。我が国で可能な活動への復帰が可能な足関節鏡視下手術ですが本邦では普及することなく現在まで欧米を中心に行われてきました。近年漸く本邦においても徐々にわれわれ始めているものの、膝関節や肩関節の様な教育システムがなく施設間格差が非常に大きいのが現状です。今後この分野において福岡大学発のエビデンスを発信できればと考えております。

臨床と研究と教育とをバランスよく心がけて、福岡大学の発展のために微力ではありますがお手伝いさせていただきます。指導・鞭撻の程宜しく御願ひいたします。

このたび松井敏幸教授の御推薦により平成二十三年四月より福岡大学筑紫病院消化器内科の講師を拝命致しました。私は平成六年福岡大学医学部を卒業後、福岡大学筑紫病院消化器科(八尾恒良教授)に入局しました。入局後は多くの諸先輩方の熱く濃厚な御指導のもと、なんと二年間の研修医を切り抜けることができたのち、二市市済生会病院、新小倉病院などの関連病院内において一般診療を、またDuke University Medical Centerに留学し癌抑制

さらには炎症性腸疾患においては、一昨年、昨年とクロン病、潰瘍性大腸炎の診断基準の改訂が厚生労働省難治性炎症性腸管障害調査研究班において松井教授を中心に行われ、この作業に携わることができました。またこの分野では潰瘍性大腸炎の胃十二指腸および小腸病変の検討を行っています。潰瘍性大腸炎はその名の通り大腸の病変と思われていますが、胃十二指腸および小腸にも病変を来すことが明らかとなり、今後その病因の解明につながるのではないかと考えています。

この様に当科では松井教授のもと臨床を中心とした研究を行っており、今後も先輩方の御指導のもと後輩の教育に努めていきたいと考えております。

脳神経外科講師

緒方 利安



脳神経外科 緒方利安です。

私は一九九七年に九州大学を卒業後、病態機能内科学に入局しました。その中には全国的にも数少ないのですが、脳卒中の臨床・研究を行っていた脳循環研究室というグループがあり、そこに所属しました。国立病院九州医療センター、九州大学病院、聖マリア病院などで勤務した後に、二〇

〇〇年より国立循環器病センター内科脳血管部門にレジデントとして、三年間勤務いたしました。その際にエビデンスを基に、考察を重視した脳血管障害の臨床を、深く勉強することができました。また、神経超音波を用いた脳血管障害の臨床について研究を行い、とくに経頭蓋カラードプラ検査を用いた研究で学位を取得しました。帰福後は九州大学病院病態機能内科学、国立病院九州医療センター脳血管内科に所属後、二〇〇九年よりオーストラリアメルボルンのNational Stroke Research Instituteに留学いたしました。そこで、現在の虚血性脳血管障害の内科治療のトピックである、経静脈的血栓溶解療法、MRI画像診断と予後についての研究を行って参りました。二〇一一年四月より福岡大学脳神経外科に所属しています。以上の履歴よりわかるように、外科に所属していますが私は内科医です。ですので、手術に入ることはなく、主に虚血性脳血管障害の内科治療や術前の検査を担当したり、神経超音波検査を行ったりしています。また、七月より脳卒中健康講座を開講し、患者さんに最近の脳卒中の治療、日常生活の注意点などについてお話しをしています。脳血管障害の約七割は虚血性であり、その九割は急性期においては内科治療を行います。脳卒中専門医として、また内科医

教室紹介

微生物・免疫学

当教室は、平成十五年四月に旧微生物学教室の八名です。さらに大学と旧寄生虫学教室の統合により永山在明教授のもと微生物・免疫学教室として発足しました。平成十八年四月より廣松賢治教授のもと学部学生、大学院生の教育と研究に取り組みしています。現在のスタッフは廣松教授以下波部重久講師、石井一成講師、副島利紀講師、伊藤竜太助教、岩田久寿郎助教、仇斌助

微生物から寄生虫までの広範囲の病原体について、その生物学的特長、病原性、宿主相互作用とその結果としての感染症について学ぶ学問です。生体防御学は二年生の科目ではありますが基礎医学から臨床医学への橋渡しの学問といえます。そこで生体防御学では講義実習ばかりでなく疾患をもとに学生が自主的に学習する演習を取り込んだ教育も行っております。研究では、細胞内寄生性病原菌(クラミジア、結核菌など)への宿主免疫応答と病原性側の宿主免疫系からのエスケープ機構について動物モデルで解析

するとともに、微生物や癌に対する新たなワクチン戦略の開発を行っております。これらの研究を新機軸として、感染性疾患の新たな取り組みが必要とされております。当教室では将来、臨床・基礎を含めて感染症の分野で活躍できるような人材の発掘を目指して精進してまいります。(文責 副島利紀)



福岡大学医学会 第64回例会および第34回総会(報告)

日時／平成23年10月13日(木) 17時～18時50分
場所／医学部臨床大講堂

1. 第64回福岡大学医学会例会 【進行】 集会幹事 三宅 吉博

- 1) 開会の辞 集会幹事 三宅 吉博
- 2) 会長挨拶 医学部長 黒木 政秀
- 3) 第13回福岡大学医学会賞受賞論文講演
講演者1…林 博之 座長…鍋島 一樹
講演者2…伊東 威 (代理：安波洋一)
講演者3…田中 景子 座長…守山 正樹
- 4) 第13回福岡大学医学会賞金賞論文投票
- 5) 学部内研究紹介講演
講演者…小玉 正太 (再生・移植医学) 座長…黒木 政秀
「臍島再生-成体で可能な誘導法について-

2. 第34回福岡大学医学会総会

- 1) 議 事 【進行】 庶務幹事 井上 隆司
 - ① 報告事項
 - ② 平成22年度会計報告および平成23年度予算案
 - ③ その他
- 2) 第13回福岡大学医学会賞授賞式 【進行】 集会幹事 三宅 吉博
 - ① 開票結果発表
 - ② 授賞式
- 3) 閉会の辞 集会幹事 三宅 吉博

祝「第13回福岡大学医学会賞」



講演された先生方を囲んで
(左から 小玉先生、安波先生、田中先生、林先生、黒木医学会会長、三宅先生)

金賞(1名)

林 博之

Overexpression of IQGAP1 in advanced colorectal cancer correlates with poor prognosis-critical role in tumor invasion

銀賞(2名)

伊東 威

High-mobility group box 1 is involved in the initial events of early loss of transplanted islets in mice

五十音順

田中 景子

Household smoking and dental caries in schoolchildren : the Ryukyus Child Health Study

長い間 ありがとうございました

(平成23年3月31日～9月30日までに退職された方)

- 桂木 猛 教授 (薬理学)
- 岡崎 正敏 教授 (放射線医学)
- 影浦 光義 教授 (法医学)
- 寺崎 明美 教授 (看護学科)
- 黒岩 中 教授 (看護学科)
- 尾首 睦美 教授 (看護学科)
- 井手口 博 准教授 (輸血部)
- 川浪 祥子 講師 (神経内科・健康管理科)



- 田中伸之介 准教授 (消化器外科学)
- 江本 精 准教授 (産科婦人科学)
- 継 仁 准教授 (脳神経外科学)
- 森重 徳継 准教授 (心臓血管外科学)
- 山之内良雄 准教授 (筑紫病院循環器内科)
- 竹内 一馬 講師 (心臓血管外科)
- 三好 恵 講師 (筑紫病院循環器内科)
- 酒井 憲見 講師 (筑紫病院外科)

以上、3月31日付け

- 大倉 美鶴 講師 (看護学科)

以上、7月30日付け

- 山田 達夫 教授 (神経内科学)
- 山本信太郎 准教授 (薬理学)
- 辻岡 寛 准教授 (産科婦人科学)
- 阿南 章 講師 (消化器内科)

以上、9月30日付け

学位取得

次の方は、平成23年3月22日付けで福岡大学より医学博士を授与されました。

課程修了による学位取得者

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 原 田 慶 美 (人間生物系) | 木 下 浩 一 (病態機能系) |
| 米 良 利 之 (感染生物系) | 小 林 達 樹 (病態機能系) |
| 牧 野 太 郎 (感染生物系) | 水 流 弘 文 (病態生化学系) |
| 三 宅 徹 (病態構造系) | 桑 野 孝 志 (病態生化学系) |
| 平 田 陽 子 (病態構造系) | 三 戸 隆 裕 (病態生化学系) |
| 樋 口 正 晃 (病態構造系) | 長 沼 康 子 (病態生化学系) |
| 福 島 隆 生 (病態構造系) | 濱 崎 悠 (病態生化学系) |
| 鎌 田 聡 (病態機能系) | 渡 邊 隆 (病態生化学系) |
| 唐 島 大 節 (病態機能系) | 松 本 太 一 (先端医療科学系) |

論文提出による学位取得者

- 宮 岡 正 喜 (筑紫病院消化器内科 助手)
- 渡 邊 真 穂 (腎臓・膠原病内科学 研究生)
- 重 松 研 二 (手術部 助教)
- 大 淵 俊 朗 (呼吸器・乳腺内分泌・小児外科 講師4条7号)
- 孫 競 (学 外 者)
- 黄 健 (学 外 者)



医師国家試験結果報告

第105回医師国家試験(2月12～14日実施)に123人が受験し、99人(新卒84人・既卒15人)が合格しました(合格率80.5%)。

看護師・保健師 国家試験結果報告

第100回看護師国家試験(2月20日実施)に101人が受験し、100人が合格しました(合格率99.0%)。また101人中96人が第97回保健師国家試験(2月18日実施)にも合格しています(95.0%)。